

なにわの漢方薬3代目主人

本紙で今回、連載四十七回目を数える「なにわの漢方薬3代目主人」の『薬屋談義』。本紙読者のあいたで好評な連載だ。筆者は永井達夫（ながい・たつお）氏。大阪の漢方薬メーカー・東洋漢方製薬㈱と漢方相談薬局・東洋漢方薬局の三代目経営者だ。「永井氏って？」の読者の声に、顧客の健康相談に日々、店頭で対応している永井氏を大阪に訪ねた。（田邊）



「私が永井達夫です」

永井氏は昭和二十六年、大阪市生まれの五十九歳。山口大学工学部化学工学科を卒業後、テルモ富士宮工場生産技術科勤務を経て、昭和五十一年に父親が経営する東洋漢方製薬㈱（工場：大阪府富田林市）に入社、昭和六十年六月に代表取締役社長に就任した。しかし今年六月、社長業

は子息で4代目となる藤吉郎氏にゆずり、現在は週のほとんどを大阪府大阪市中央区日本橋にある同社相談薬局・東洋漢方薬局で、顧客からの健康相談対応と効果的な漢方薬服用を勧める店頭業務に従事している。東洋漢方製薬㈱は、顆粒・扶漢方の創始者である父親・永井藤治（ふじはる）氏が昭和四十六年に、祖父・長倉善藏氏と二人で創業した長倉製薬㈱（本社：大阪市中央区日本橋）の薬局部門の譲渡を受けて設立された。特に祖父・善藏氏は全国各地で実践的な漢方薬指導を重ねるなどして、「長倉漢方」の異名をとり、善藏氏の遺稿をうけた薬局薬店関係者は全国に多い。永井氏はこの「長倉漢方の正統な系譜」を継ぐ。東洋漢方に配る書籍も出版している。配販販売への直接関与はない。薬日新聞の読者には、配販販売関係だけでなく、薬局薬店関係者も配販販売関係者と比べ、必ずしも存在する。永井氏はその少ない薬局薬店関係者読者の一人。そんなことから、現在の永井氏の本紙での連載も始まった。東洋漢方製薬と東洋漢方



大阪府富田林市の東洋漢方製薬工場。自社製品製造ほか漢方製剤の受託製造も

薬局の創業の原点は「治りたい心と治したい心が一つになって、病む人の健康へ



品質の上下差は激しく、局方規格以外においても生薬毎に大切なポイントをチェックしたり、あるいはどのようなときに、どのように服用するかとの適切な服用法が実践されないと、効くはずの漢方処方も効かないものとなる。安心して服用してもらい、なおかつ確かな効き目を最大限に引き出すために適切な服薬指導を伴う良質な製品供給に創業以来一貫して取り組む。「数千年の時を超えて受け継がれて来た先人の健康に関する知恵の伝承を、さらに数千年の歳月を経て正しく価値あるものとして引き継がれるようにしていく」

のお手伝いをする」。漢方生薬は合成されたものとは違い天産物であって、同じ漢方生薬であっても



大坂市中央区日本橋の東洋漢方薬局店頭で毎日のように来店者の健康上の悩みに答えている永井氏。アドバイスは積み重ねた販売実践に基づく

とが東洋漢方製薬及び東洋漢方薬局の使命」と語る。

顧客への適切な情報提供や相談対応を伴う医薬品販売は当然、配置販売業の在り方にも通じる。

現場体験から配置販売業

については、「今後、現在まだ出現していない、新しいタイプの配置販売業が、がいずれ出現してくるかも」と、配置販売業の可能性についても大いに期待を語る。